

音楽の友

ONGAKU NO TOMO

2010.6月号

Concert Reviews

オーケストラ 東京ニューシティ管弦楽 団 (第67回)

今回の呼びものは、新実徳英の委嘱作の初演と、ベートーヴェン「交響曲第9番」の近年の研究成果を踏まえた演奏である。委嘱作《シンフォニア2010》は、冒頭から「新実トーン」で、弦楽器と鍵盤打楽器群の醸し出す音の干渉による余韻の美しさは新実の独自の世界だ。音楽象の変化の過程、音色彩の変化の過程ともに優れた作品で、新実はここで自己の根源を（高次の次元で）再発見したかに思える。全体は緊張に

終始満ちており、また聴き手を圧迫するエネルギーに満ちていた。

ベートーヴェン《第九》への近年の研究に基づく演奏は、新しい楽譜の出版前にガーディナーが92年にオリジナル楽器によるCDを出しており、新楽譜の出版後には日本盤だけでも2枚CDが出ている。今回、指揮者の内藤彰が日本人で初めて試み、奏法も当時のものに近づけた。問題は新たな速いテンポによる演奏だが、全体的にややせかせかせかした観は否めない。終楽章はさすがにアンサンブルという点では最も揃っているが、4人のソロ（森麻季、菅有実

子、福井敬、河野克典）も本来の速いテンポを見事にこなしていたが、オケがやや焦り気味に聴こえた。だが内藤の仕事は意義深く、今後のベートーヴェン演奏に一石を投じたと言っべきだろう。4月9日・東京芸術劇場

●佐野光司